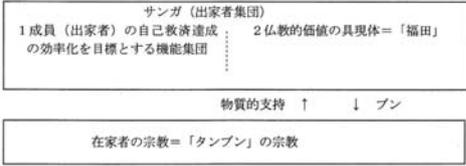




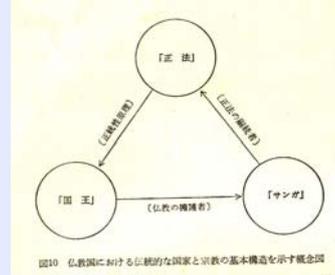
## 2. 正法を広める仏道

共生の構造 (石井米雄『世界の宗教8 戒律の教い』p.174)



- ◆ 仏伝における出家の意義の理解
  - ◎単に修行のため?
  - ◎不殺生、戦争、王権というモチーフ

- ◆ 現代タイの「正法」理念



石井米雄『上座部仏教の政治社会学』創文社、1975年

- ◆ 中村元『宗教と社会倫理』岩波書店、1959年
  - 第1章 インド民族誌資本の精神構造への一視点
  - 第2章 民衆の職業倫理——叙事詩——
  - 第3章 普遍的宗教の経済倫理——原始仏教——
  - 第4章 都市興隆時代における国家意識
  - 第5章 国家統一における政治理想
    - アショーカ王——
  - 第6章 帝王の権威と宗教
  - 第7章 分立国家における政治理想
    - 大乘仏教——
  - 第8章 経済倫理における奉仕的精神
    - 大乘仏教——



- ◆ 《国家が「完全な知恵」の真理を実現すべきであるという主張は、国家に対する宗教の指導的意義を説くものである。こういう理論的根拠にもとづいて大乘仏教は新たに積極的に国家指導に乗り出すことになった。もちろん初期の大乘仏教徒のうちには、原始仏教以来の出家教団の気風に従って、国王に近づかず、政治に参与しないことを意識的にめざす修行者の群もあった。》p.320
- ◆ 《しかし、現実の社会には、国家の力によらなければ解決のつかない問題も多数存する。大乘仏教では特にこの種の問題を取り上げて、積極的に政治指導の問題につき入ることとなったのである。》p.321
- ◆ 中村元『宗教と社会倫理——古代宗教の社会理想』岩波書店、1959年

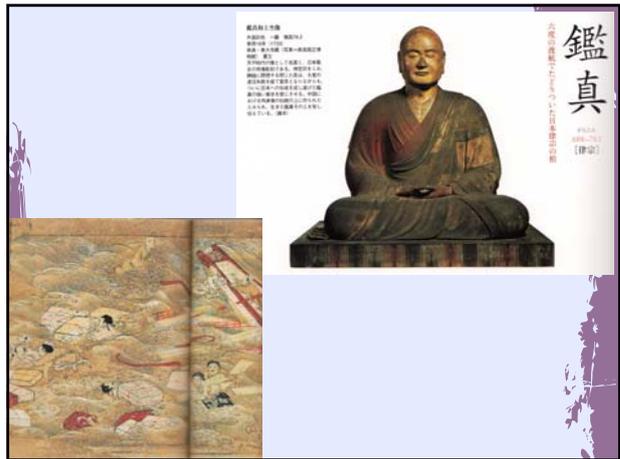
## 3. 日本古代仏教における正法理念の重要性

- ◆ 日本仏教史においては、正法理念が度々問われ、新たな運動や思想を生み出してきた。
- ◆ 仏教国家の追求——『金光明経』の重要性
  - 天武・持統朝 → 聖武朝
  - 四天王信仰、民衆仏教の呼応 —— 行基ら
- ◆ サンガ (僧伽) 確立運動としての古代仏教
- ◆ 戒師 = 鑑真招請の意義。
- ◆ 最澄と大乘戒運動

- ◆ 金光明最勝王経
  - ◎日本仏教の基底を形作った經典として要検討
  - ◎東大寺・国分寺はこのお経の寺 (国分尼寺は法華経の寺)
  - ◎四天王寺も金光明経に典拠。東大寺・四天王寺は四箇院 (施薬院・悲田院・敬田院・療病院) に関連深い
  - ◎懺悔 (悔過)、放生会、捨身飼虎
- ◆ 卷第八 王法正論品第二十
  - 「若し正法の王たらば、国内に偏党なし、法王名称ありて、普く三界の中に聞ゆ。三十三天の衆、歡喜して是の言を作す、「瞻部州法王、彼は即ち是れ我が子なり。善を以て衆生を化し、正法もて国を治め、正法を勸行し、当に我が宮に生ぜしむべし」と。
  - 天及び諸天使、及び、蘇羅衆、王の正法の化に因りて、常に心に歡喜を得。

- ◆ 天衆皆歡喜して、共に人王を護り、衆星位に依りて行き、日月乖席なし。和風常に節に応じ、甘雨時に順いて行なわれ、苗実皆善を成じ、人飢饉の者なし。一切の諸の天衆、自宮に充滿す、是の故に汝人王、身を忘れて正法を弘め、応に法宝を尊重すべし、斯れに由りて衆安樂ならん。常に當に正法に親しみ、功德自ら莊嚴すべし。
- ◆ 眷属常に歡喜し、能く諸の惡を遠離す、法を以て衆生を化し、恒に安穩を得しむ。  
彼の一切の人をして、十善を修行せしめ、率土常に豊樂にして、国土安穩を得ん。  
王、法を以て人を化し、善く惡行を調べば、當に好名稱を得、諸の衆生を安樂にすべし。

- ◆ 四天王護国品 第十二  
若し人王ありて、此の金光明最勝の經典を恭敬し供養せば、汝等常に勤めて守護を加え安穩を得しむべし。汝諸の四王、及び余の眷属、無量無数百千の葉叉、是の經を護る者は、即ち是れ去・來・現在の諸仏の正法を護持するなり。汝等四王及び余の天衆、并に諸の葉叉が阿蘇羅と共に鬪戦する時、常に勝利を得ん。
- ◆ 善生王品 第二十一  
善生王なる人王が宝髻如来の涅槃の後に轉輪王となって、四州を統治していた。その王がある夜、宝積という法師が『金光明經』を演説しているのを夢みた。王は夢からさめてから、『金光明經』を讀歎するというものである。そして最後に、善生王とは釈迦牟尼仏であり、宝積なる法師は東方不動仏であるという本生譚で結んでいる。(壬生台舜『金光明經』大蔵出版、1987年)



梵天、帝釈天、四天王(持国天、増長天、広目天、多聞天)、金剛力士(両下部)

#### 4. 正法と鎌倉仏教以後の日本仏教

- ◆ 中村元他編『岩波仏教辞典』第二版、2002年
- ◆ 正法——正しい道理。正しい教法。道元の『正法眼蔵』における(正法)はこの意。また、この正しい教法が世に行われる期間をさす。すなわち、正法・像法・末法の中の正法年間のこと。正法時は釈尊滅後、500年または1000年」の間をさし、教・行・証、つまり、教えと教えを実践する人と、これによって(正)法を興く人のある時期とされる。

- ◆ 妙法——サンスクリット語は、dharma(法)にsat(正しい、善い、真の意)が冠せられたもので、すでに法句経などの原始經典に見えており、多くは(正法)と漢訳され、法華経の題名saddharmapundarikasūtraについても、竺法護訳(286)は(正法華経)となっている。それが鳩摩羅什訳(406)では(妙法蓮華経)と訳しなおされた。(中略)羅什の弟子の道生から法雲・智ぎ(豈十頁)にかけて、法華経の註釈に際し、(妙法)を絶対の真理と解するにいたる。「妙法伝へ難し、その道を暢ぶる者は聖帝なり」[頭戒論縁起](以下略)

#### ◆ 「正法」理念の諸側面

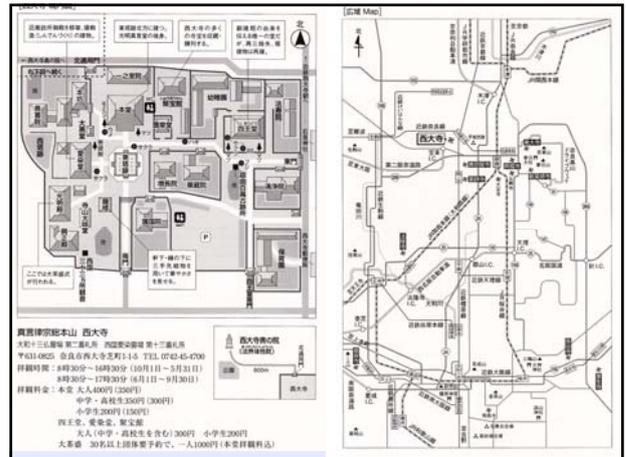
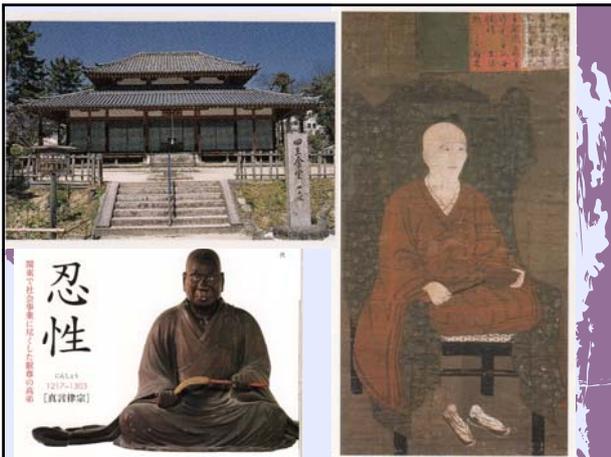
- ①正しい法。法の混乱に対して、正しい法が希望。
- ②正法の流布は国家を平安にする。
- ③正法を打ち立て護ることは国王の責務。
- ④正法は真正なサンガ(僧伽)と不可分(三宝)。
- ⑤サンガは王に護られつつ、正法を弘める。
- ⑥真正なサンガが崩壊することと、統治が乱れることは不可分。
- ⑦末法とは、真正なサンガが成り立たず、正法の流布が困難になった時代。

- ◆ 道元『正法眼蔵』、『正法眼蔵随聞記』。  
道元の「護国正法義」はどのようなテキストだったか？  
道元は「慈悲」を尊んだとすれば

◆ 「榮西の存生の中に、建仁寺にある貧しい人が訪れて、親子三人餓死寸前であると救いを求めて来たとき、薬師像を造るための光背用の銅の延べ板を与えて、これを売って食料にかえて飢えをしのがせ、自分が仏物を己用してたとえ悪趣に陥ることがあっても辞さないといったこと、またある檀越から贈られた絹の一疋が建仁寺の衆僧たちの粥に代わる貴重なものであったにもかかわらず、どうしてもそれを入用とする俗人のために惜気もなく与え、これによって共々餓死することがあっても苦しからずといったことなどを、先達の心中のたけ今の学人も思ふべし、忘るゝこと莫れといひ、まことに道者(榮西)の案じ入たることかくの如し」と。(古田紹欽『榮西・喫茶養生記』(講談社学術文庫、1982年より))

- ◆ 西大寺は東大寺を引き継ぐ国家的寺院として建造を企図された。
- ◎ 聖武天皇が後継者とした女帝、孝謙天皇(阿倍内親王)によって建造が宣せられた。
- ◎ 「金銅四天王を祀る寺」。これは金光明最勝王経の内容に即したもの。764年9月11日、恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱の始まった日。
- ◎ 765年四天王像ができあがり、続いて像を安置する四王堂が造営された。この間に、淳仁天皇は淡路に流され、出家した孝謙天皇が重祚して称徳天皇となる。
- ◎ 壮大な伽藍計画となるについては道鏡の影響を推測。766年、道鏡は法王に。仏教よりの政策。
- ◎ しかし、道鏡は失脚し流罪(769年)、称徳天皇崩御(770年)により、西大寺の壮大な建造計画は頓挫。

- ◆ 叡尊(1201-90)
- ◎ 興福寺学侶の慶玄の子として生まれる。
- ◎ 高野山や醍醐寺で真言密教を学ぶが、正法復興を目指し、自誓受戒を始める。
- ◎ 35歳で西大寺の住職となり、四王堂の前で『金光明最勝王経』を転読。四王堂を『最勝王経』の同上とする誓を立てた。
- ◎ 北条(金沢)実時の招請文(和島芳男『叡尊・忍性』)  
「近来仏法世に弘まり、僧侶国に満といえども、いたずらに論議をたたかわし、名利の門におもむくのみであって、出離解脱の道を聞くことが無い。したがって在俗の輩も次第に猛悪となって因果の信すべきことを知らず正法のあがむべきを弁せず、仏法も国土もともに衰退におちいつている。伝え承れば西大寺の長老はひとり正法を行い、道俗化導に預かって因果の道すでに顕われ、貴恩恩益を蒙って解脱の縁ようやくきざす由。南都すでにかくの如くならば東夷も同様でありたいものである。よって前執権最明寺入道時頼も同心の上で請じ奉るのである。もし下向けれるならば、法のため国のため莫大な利益(りやく)とならう。逗留は必ずしも久しきに及ばず、一夏(いちげ)の間化導を致されなば、どうして正法に帰せざるものがあるらうか」



**おわりに**

◆ 日本仏教から社会倫理の発信を

2006年

2006年(原著、1992年)

2013年